

校長室から
(H30年度)

ひがしなら通心

茨木市立東奈良小学校 川上 隆 No. 50

平成31年1月22日(火)発行

勇者たちがつなぐタスキのドラマ

毎年、1月2、3日に行われる箱根駅伝。テレビで観たことがありますか？正式名称は「東京箱根間往復大学駅伝競走」と言います。10人でタスキをつなぎ217.1キロを走りますが、毎年多くのドラマが生まれます。今年は、青山学院大学の5連覇がかかっていましたが、往路・復路共に2位の東海大学が優勝し、青山学院大学は復路で1位でしたが総合2位でした。

2016年大会では、駒澤大学の馬場翔大（ばば しょうた）選手の快走でした。前回2015年大会で往路5区（山登りの難コース）を任された馬場選手は、途中、脱水症状と低体温症で体がけいれんし、意識もうろうとなりながら何とか走りきりました。でも、ここでトップとの差が大きくなったことで、青山学院大学に優勝を奪われ、駒澤大学は2位でした。馬場選手は何度も「走るのをやめてしまおう」と思ったそうです。しかし、あきらめずに努力して練習に励み、大学4年生としての2016年大会では、復路8区を任せられ2位の快走で、見事に自分自身の壁を乗り越えました。この箱根駅伝には勝者も敗者ありません。そこにあるのは、「タスキをつなぐ」というチームのために果敢に自己の限界に挑戦した「勇者」だけなのです。

さて、この箱根駅伝、いつ・誰が・どうして、始めたのでしょうか。それは、今年のNHK大河ドラマ「いだてん」に出てくる金栗四三（かなくり しそう）さんです。金栗四三さんは、日本人初のオリンピック選手なのです。今から100年以上前の1912年、第5回スウェーデン・ストックホルム大会でした。出場選手は2人、陸上短距離の三島弥彦（みしま やひこ）選手とマラソンの金栗選手でした。結果は2人とも散々なもので、マラソンに出場した金栗選手は熱中症にかかり、途中で行方不明となり棄権してしまいました。



金栗選手は、世界の壁を大きく感じました。そして、これから日本人の若いスポーツ選手を育成し、競技レベルを上げるために一つの大きな決意をしたのです。それが、世界に通用するマラソン選手の育成をめざした、大学生のための「箱根駅伝」です。だから、金栗四三は、箱根駅伝に尽力し日本マラソン界の発展に大きく寄与した人物として「日本のマラソンの父」と呼ばれています。

みなさんにも、この箱根駅伝の選手のように、自らの目標に勇敢にチャレンジする、そんな新しい1年を過ごしてほしいと願っています。

自尊感情を高めるためには

ある調査で、「自分はダメな人間だと思いませんか？」とたずねた時に、日本の高校生の「そう思う」「とてもそう思う」が75%に達し、他の国々と比べて倍ぐらいあったとの結果がでました。また、別の調査でも子どもの学年が上がるにつれて自尊感情（自分のことが好き）が低くなっていくことも分かっています。その理由としては、「けんかをしてしまうから」「運動や勉強が苦手だから」「すぐにあきらめてしまうから」「友だちに優しくできないから」や「家の人にいつも怒られるから」も多くみられました。

逆に、自尊感情が高い子どもは、その理由として「学校が楽しいから」「友だちがたくさんいるから」「勉強やスポーツを頑張っているから」「自分の目標に向かって努力しているから」など前向きな感想を持っていることが分かりました。特に「家の人にほめてもらえる」ことが自尊感情の高い理由になっていることが分かりました。

ほめて育てることの大切さは、以前からも言われていることですが、ことばかけのNGポイントが五つあります。

- ① 子どもの感情を受け止めない声かけはNG
- ② 子どもの努力を認めない声かけはNG
- ③ 兄弟姉妹や友だちと比べた声かけはNG
- ④ 「早く」や「急いで」という声かけはNG
- ⑤ 子どもが失敗したときに責める声かけはNG



自尊感情を高めることは、学習面だけでなく生活面やスポーツ面にも大きく影響します。そのためには、五つのNG声かけではない声かけをすることが大切です。日常の姿を肯定的に「認め、ほめ、励まし、伸ばす」声かけです。

みんなのためのルールブック

「あたりまえだけど、とても大切なこと」 ロン・クラーク 草思社

ルール5 勝っても自慢しない、負けても怒ったりしない

もし君が何かで勝ったりうまくやったりしても、自慢しないこと。もし負けても、怒った態度をとらないこと。「わざと負けてやったんだよ」などと言うのは、弱さのあらわれだ。

●自慢をする人は、誰からもよく思われない。もし君に得意なことがあるなら、自信は持っていていいが、自慢はしないほうがいい。負けたときは、こんなふうに言ってみよう。「試合、楽しかったよ。また君と勝負するのを楽しみにしているよ」大切なのは、ベストをつくして楽しむことで、負けても言い訳をしないことだ。